
4. 高齢路上生活者自立支援施設の提案と山谷のまちづくり

高齢路上生活者自立支援施設検討会
(東京都荒川・台東区)

1. ふるさと千束館の開設

◆高齢路上生活者自立支援施設をつくろうと思った背景

東京都山谷地域は日雇い労働者の寄せ場として成立し、不況の中での失業問題と連環して約3000人のホームレス+ドヤ居住者8000人という問題を抱えている。

ボランティアサークル・ふるさとの会ではこれまで、そうした山谷地域を中心に、炊き出しボランティアから共同リビングの提供、その他さまざまなイベントの開催などを通して路上生活者のケアをおこなってきた。しかし、そうした単発的ケアの限界を感じ、24時間体制での自立支援施設の必要性を感じ始めていた。

自立支援施設とは、長い路上生活等で失われた生活のリズムをとりもどす訓練をすることにより、自らの意志で生活をかたちづくっていくための支援をする施設である。

◆はじめの一步 ——パンフレットづくり

そうした要請にこたえるため、建築・まちづくりを専門にするメンバーによって、高齢路上生活者自立支援施設検討会（通称、山谷プロジェクトチーム）は生まれた。

ふるさとの会からの当初の要請は、彼らが高齢路上生活者の自立支援施設として抱いている漠としたイメージを目に見えるかたちにしてほしい、ということだった。行政・住民・市民の理解を得るためには具体的な目標空間イメージが必要だからである。我々は仮想の敷地を設定し、パタンランゲージなどの手法を用いながら、イメージを具体的な図面に置き換えていく作業をはじめた。

最終的に提案したものは、最小限のプライバシーが守られる個室群と、それらをつなぐ明るい共有空間で構成されている。共有空間は3段階にわけて配置された。

- (1) 小人数の居住者が集まれる小さな共用スペース
- (2) 居住者みんなが集まれる大きな共用スペース
- (3) 居住者だけでなくまちの人が加わることのできる開かれた共用スペース
(ホームページに掲載：<http://www.asahi-net.or.jp/~sm2k-tmr/sanya.htm>)

ふるさと千束館



◆実現へのいきさつ

自立支援施設を構想だけで終わらせないため、ふるさとの会でも地道に不動産物件をあたっていったが、資金的に厳しく、加えて施設に対する理解を得ることが難しいことなどもあり、なかなか実現のためのスタートを切ることができなかった。

しかし、そんな中からも、こうした事業に一定の理解を示してくれる家主と不動産業者が現れ、1999年3月、小さな古い木造住宅を借り上げて改造工事を行なうことができたことになった。また、都との協議を経て、生活再建のための施設ではあるが長期居住型の自立支援施設ではなく、短期の通過施設である「東京都第二種社会福祉事業・宿泊所」としての施設計画となった。ここでは特に、自立支援の活動実績を積み上げていくことが重要な課題といえる。

山谷プロジェクトチームのメンバーの小野が設計監理の実務にあたった。内部のベッド工事はメンバーの関内が設計製作を請け負っている。

借り上げることでできた物件は、木造在来工法2階建、戦後間もなく建てたと思われる平屋住宅部分に、おそらく二度増築を繰り返して（増築部分も築30年以上経っていると思われる）現在の姿となっていた。

<計画概要>

計画地：東京都台東区千束3-28-6 沖荘（賃貸）

地域地区：商業地域、防火地域

床面積：1階 70.32 m² (21.27 坪)

2階 19.87 m² (6.01 坪)

合計 90.12 m² (27.28 坪)

建築主：ふるさとの会 藤井 恒昭

設計監理：小野建築設計室 小野 誠一

施工者：亀工房 亀澤 秀樹

SEKIUCHI Furniture Factory 関内 潔

工事費：税別¥6,950,000-（追加工事費別途）



改修工事（居室）

◆構想と実現のはざま

限られたスペースと予算の中ではパンフレットで提案したすべてを盛り込むことはできない。優先されたのは共有スペースだった。各人のプライバシーがしっかり守られてこそその共有スペースだという意見も交わされたが、孤独感にさいなまれることの多い彼らにとっては、ドヤの狭い寝床から抜け出して人と交わることが自立への第1歩であり、心の安寧と生活の再生は日常のささやかな交流から成立つものと考え、安心してくつろぎ、人と語らうことのできる場所をもっとも大切なものと想定した。

しかし、パンフレットで提示したような段階的な共有空間群にはならなかった。(3)の地域に開かれた共用スペースは、許容面積の問題もあるが、この施設がまだ地域に十分に理解されていないことや居住者間の関係を見守ることが優先されたため、今回は特につくられなかった。(1)の少人数で集まれる共用スペースについても実現できなかった。少人数の中では共依存や支配関係が生まれてトラブルの原因になることもしばしばあるという。これら共用スペースのあり方は今後試行錯誤を重ねて探っていくより他ないだろう。

◆設計・工事をすすめるなかで

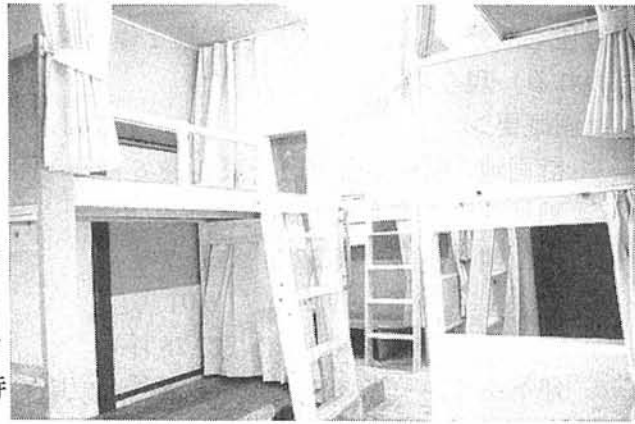
実際の借家賃貸契約は1999年4月中旬。急ピッチで打合せを重ね、計画を練り、1ヵ月後の5月中旬に工事金額、内容が確定し、借り上げ住宅の改造工事に着工した。裏手には木造2階建アパートがつながっており、改造計画は工事期間中も含めて、近隣、隣家への対応、説明などを繰り返しながらすすめられた。計画時には東京都の更正施設や民間で本計画と同様の宿泊所等を見学し、施設運営上のさまざまな話を聞くことができた。

運営の採算性などについてはふるさとの会でもかなり苦慮し、東京都から資金繰り計画等についての見直しをせまられる場面もあった。入居定員15名でスタートした計画は、結果的には予定していたベッドすべてを2段ベッドに仕様変更して、28名入居可能な状態とすることになった。こうした過程においては入居者個人に対するケアの不足も危惧されていたが、実際に運営をされてみてどうなのか、今後の長期的な検証も必要だろう。

◆ふるさと千束館の開設

1999年6月20日、工事は無事完了し、翌週から入居者の受け入れを開始して24時間体制の第二種社会福祉事業・宿泊所『ふるさと千束館』の運営がいよいよ始動した。

現在の千束館は、通常20名程度の入居者に対して、毎日の食事・入浴を中心に月に何度かの医療ケアなどさまざまな活動を投入しつつ、自立生活のための環境を維持している。



2階居室のベッド群

◆ふるさと千束館をめぐるこのからの課題

自立支援施設を考えていく上で、共有空間の使われ方、個人空間のあり方など、今後の施設づくりに関わる計画面の検討や、地域に開かれた施設となるための取り組みをどのように組み立てていくのか、といった課題が残されている。しかし、ふるさと千束館が実際に運営されていることでⅢに示すような事業も展開できており、ここをケーススタディとして多くの課題に取り組んでいけるはずと考えている。

現在の活動は以下のようなまちづくりへと拡大している。まちづくりの中での自立支援施設づくりのプログラムを構築していくことが、これからの主要テーマの一つとなる。

II. まちづくりへの発展

●シンポジウム「ホームレス：家をなくした人たちの自立再生の展望」

(新建築家技術者集団東京支部・日本住宅会議関東会議の共同主催)

1999年6月、「住まいの原点を問う」という共通テーマで実施された連続講演会の第1回の企画として行われることとなり、山谷プロジェクトチームでもメンバー永井を中心として準備作業に携わった。パネリストは岩田正美(日本女子大)、水田恵(ふるさとの会)、ありむら潜(西成労働福祉センター)、大崎元(山谷プロジェクトチーム)の各氏、コーディネーターは中島明子氏(和洋女子大)で、このときにホームレス問題を地域のまちづくりに連動させて解いていこうという展望が見い出された。

●「路上生活者と共に活動する『山谷』ふるさとまちづくりの会」

(略称：「山谷」ふるさとまちづくりの会)

上記シンポジウムをきっかけに、ふるさとの会と山谷プロジェクトチームが呼掛けて発足した。建築・まちづくりに関係するものだけでなく、社会学やボランティア、学生など、関心のあるすべての人に開かれている。

山谷地域に典型的に現れている路上生活者問題を、その問題だけで個別に取り扱うのではなく、山谷というまち全体の問題として位置づけ、「まちづくり」という視点で解決の道を探っていこうとするものである。月1回のペースでこれまで(2000年4月)8回の会合をもち、ふるさと千束館に関するその後の動き、ホームレス問題・山谷地域における行政その他の動きなどの情報交換・意見交換をしたり、地域調査、勉強会・見学会を開きながら、山谷における今後のまちづくりのシナリオを模索している。

●「(仮)浅草史誌」の発行

上記の「山谷」ふるさとまちづくりの会の活動の1つとして発行していく。目的は会の動きを常に公開していくことで多くの人に関心をもってもらうこと。同時に、住民自身も把握しきれていない山谷地域の客観的な現況や山谷のまちづくりに関わる様々な情報を提供していくこと、である。

III. ふるさと千束館 その後

ふるさと千束館を起点にした活動としては次のものが行われた。(2000年4月まで)

●「ふるさと千束館特別コンサート」悠久の音色～胡琴の夕べ～

住民や地域で活動する人々に千束館の存在を知ってもらうとともに、千束館の中の様子を体験することで千束館を身近に感じてもらう機会として開催された。地域でのネットワークづくりにつながることを期待されている。

日時：1999年10月30日(土) PM5:30～7:00 場所：ふるさと千束館

内容：費 堅蓉(フェイ・ジェンロン)さんによる三弦と琵琶の演奏。分かりやすい解説とともに何種類もの楽器が奏され、素晴らしい演奏に一同釘づけとなった。

参加：地域住民(町内会等)、千束館居住者、東京都関係者、報道関係、研究者、ふるさとの会会員、まちづくりの会メンバー

●環境行動事業 ——①ソーラーシステム、②廃棄物再利用、③緑化計画

(社)住宅生産団体連合会「住宅関連環境行動助成」を受けながら、千束館居住者にもまちの人にも利益の出る環境行動事業を率先して行なうことによって、いまだ理解されにくいこの施設に少しでもよいイメージをもってもらえることを願って行なった。特に③では、千束館のまわりで何人ものボランティアが試行錯誤しているところを見たり、花(タンポポ)が配られたりしたために、道ゆく多くの人に関心を寄せてくれた。具体的には、

①真空式ソーラー温水器と太陽電池パネルの設置。

②台所から出る生ごみを処理するためのコンポストの設置。

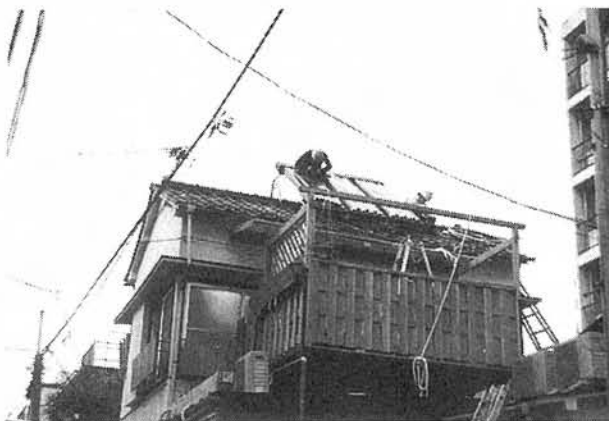
③道路に面する壁面やベランダ手摺などにプランターやワイヤーを設置しての緑化。

IV. 新たな動きの中から

■女性ホームレスのための自立支援施設

ふるさと千束館に続いて、女性ホームレスのための路上生活者自立支援施設の計画が今動き出している。女性の場合は男性ホームレスとはまた違った状況があり、我々の目には見えないかたちでのホームレス状態の人たちが各地の施設にかなりの数収容されている。

今回はふるさとの会が他の場所で運営している「共同リビング」の機能もここに移し、その他地域に住む高齢者の援護対策としてショートステイなどの機能も含めていきたいと考えている。ふるさと千束館ではあまり実現できなかった「地域に開かれた」施設というもののあり様を、ここでは展開していきたい。



ソーラー（給湯）システムの設置